

保育士の思い

- アンケート調査より -

Thoughts of the Nursery School Teachers
- from the Questionnaire -

永井 広克
NAGAI Hirokatsu

1. はじめに

女性の社会進出が高まり、女性が従事する職業が多様化している。OL はもとより、従来はもっぱら男性の職場だった運輸業界や建築業界などに、女性の姿がちらほら見受けられるようになった。女性が大型トラックやダンプカー、バスや電車の運転手を務めたり、大型クレーンのオペレーター、大工や左官などの職人として働いていても、女のくせにとか女だてら、とかいって非難されたり、陰口をたたかれることはほとんどなくなった。男の仕事と女の仕事の垣根が完全に取払われたわけではないが、その高さはとても低くなった。しかし、女性の三大人気職業である保育士、看護婦、教員の志願者が減ったわけではない。資格が物を言い、不況にも強い、この3つの職業がいっそう人気を呼んでいる。

女性の生き方を、専業主婦型、中断再就職型、仕事継続型に分けると、仕事継続型を理想とする女性が増えている。¹ しかし、子どもを産むと子育てに追われ、仕事をやめざるを得なくなる場合が多い。「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業が、働く女性に対しても重苦しくのしかかってくる。

そこで筆者は働く女性の代表として保育士を選び、彼女たちが仕事と家庭の両立をいかに行なっているかアンケート調査を実施した。² その結果、義母や実母、さらには夫が家事や育児を大いに手伝っていることが判明した。女性が結婚して仕事を継続するには、家族や親族の協力が不可欠なのである。

そして、質問紙の末尾に、保育士という仕事に対する思いや、仕事と家庭を両立するために工夫していることを、自由に記述してもらったが、思いがけずたくさんの方が詳細に書き込んでくれた。³ 本稿はその自由記述を分析したものである。

2. 保母と保育士のあいだ

男女共生時代を反映して、もっぱらで女性で占められていた保育職に男性がちらほら見受けられるようになった。保母さんに対して保父さんが保育園で働くようになった。⁴ そこで旧厚生省は1998年に女も男も表せるように、保母や保父に替えて保育士という名称を決めた。

もちろん、筆者はそのことを承知していたが、働く女性の代表として女性保育士を選んだので、男性保育士と区別するためにあえて従来通り、保母という名称を使用した。保母という名称が気に入らなかった回答も多少見受けられた。

大学の教員という立場にある方が、保母から保育士に変わったがまだ保母を主として使われているのを見て、社会的にはその程度の位置しかないのだろうか、と少し残念に思いました。(45 - 49 歳)

たしかに、保母という名称を使うことに、心の片隅で引っかかるものがあった。保育士が専門職的な響きを帯びているのに対し、保母は、遊び半分の気楽な仕事という響きが幾分感じられる。筆者の心にもそのような感じ方が全然なかったとは言えない。

社会情勢の変化と共に、保母から保育士という名称に変わりました。女性の社会進出と共に、保育園は低年齢児保育をますます強化して、家庭に替わって保育を充実しなければならない現状です。また地域ぐるみで子育てを応援しなければ、地域では子どもが育たなくなっているのです。保育園がその役割を担って、園開放やサークルを開設して、たくさん利用者があるように、日々、努力しているところです。働きやすい社会作り、職場作りをし、保育園側も家庭と両立しながら働く職員集団なので、勤務形態をローテーションで明確な基本線作りを工夫している。(55歳以上)

保母という名称が敬遠されるのは、子どもと遊んでいるだけの気楽な仕事という社会通念に対し、社会的に有用な大事な仕事として認めてもらいたいという願望の裏返しである。保育の仕事の厳しさと尊さを、世間の人にわかってもらうと共に、自分も職業人として誇りを持って働きたいという願望である。しかし保育のプロとしての限界も幾分感じて人もいる。

学生の頃は自分の子を保育園に預けて、人の子を保育することに、疑問を持ったこともあった。若い頃は保母は保育園で母であるという思いから、子供に何でもしてあげるのが当然だと思っていた。しかしこの頃、保育士は頭の中で養護の援助として理解していても、実際は「親にしてもらうこと」「親がすること」としての部分が多々あるように思われる。ひとつの仕事として割り切れないせいだろうか。福祉の部分が薄れていくように思う。(55歳以上)

保育士の仕事が、世間の人々が考えているより、はるかにきつい仕事だということを認めてもらうには、筆者が行なったささやかな調査でも何らかの役に立ったようである。⁵ ある人は「お礼」として次のように書いている。

私は“保母”になりたくて希望通り公立保育所に勤めていますが、最近の保育所経営をみて感じるのは働く母親の支援をするのはよいけれど、時間内の勤務だけして自分の子どもの世話をしたいと考えている保母はどうなるの？ その保母の子どもの幸せはどう保障されるの？ 延長保育をさせたくないと思っている若い保母は結婚できないの？ という気がします。貴学からのアンケートにとっても関心を持ちました。「保母の仕事と家庭」について少しでも明るいきざしが今後みれることを切に願っています。がんばってください!! 小矢部より応援しています。(45 - 49歳)

以下、若い年齢から順を追って、彼女たちが仕事と家庭をいかに両立しているか見ていこう。

3. 年齢別事例

(1) 20代前半、独身の場合

先輩が家庭と両立していますが、実際、結婚しても仕事を続けられるかとても心配です。しかし、とても責任あるすばらしい職業だと思っています。とりあえず今は結婚するまで頑張るつもりです。

(4人 実父 実母 祖母)⁶

子どもたちの成長を身近で感じ取れ、そのことはとてもうれしく思っている。しかし、朝早くから夜遅くまでいる子への難しさを最近感じる。職場では勤務時間内に書類を書けることはほとんどないので、いつも家で1時間程度、書類などを書いている。結婚を考えると、両立は難しく感じる。

(5人 実父 実母 祖父 祖母)

私はまだ独身で、家のことは母にまかせっぱなしです。それでも毎日、くたくたに疲れています。今後、結婚し、子供を産んで育てていくには、夫や両親などの協力が不可欠だと思います。やりがいのある仕事だけれど、その分ハードです。(3人 実父 実母)

保育士になった動機は圧倒的に「子どもが好きだから」が多いが、⁷ それだけでは長続きしないのが保育士という仕事なのである。看護婦や教員の場合は、そのきつさはそれなりに世に知れ渡っているが、保育士の場合は、傍から見た場合といざ自分が従事した場合の落差が大きい。それゆえ、結婚し、出産しても続けられるかどうか不安になるが、やりがいのある仕事なのでできれば一生続けたいと望んでいる。そのためには家族の協力が不可欠だと痛感している。

(2) 20代前半、既婚の場合

現在、育児休暇中ですが、我が子との時間を十分に味わっています。休暇が終わり、仕事と育児の両立できるかとても不安です。職場にいる時だけの時間で、すべての仕事を終えられるような時間のとり方ができればと思います。家に帰ってからは家事と育児だけでできればいいというのが私の理想です。

(3人 夫 息子)

保育士になって経験が浅いまま結婚、出産に至って現在育休中なので、今の育児を通しつつ、振り返って反省したり、親の気持ちがわかってきたり・・・の毎日です。ここで感じたことや子どもや保護者に対する思いを、復帰したら生かしていこうと思っています。ただひとつ思うのは、保育ニーズが多様化し、複雑化する中で、保育士自身の心身が現実についていくのが困難になってきているのでは・・・ということです。病院など医療の現場でもそうかもしれませんが・・・。第一に、子どもを預かる保育士自身がゆとりを持てるように、人員面、設備面で行政との協力で向上していかななくては、と思っています。(7人 夫 義父 義母 息子 娘 夫のきょうだい)

晩婚化時代を反映してか20代前半の既婚者は少なく、回答は2通のみだった。2人共、目下、育児休業中で、仕事は休んで子育て真最中である。

1人は核家族、もう1人は拡大家族だが、どちらも保育士の仕事の忙しさを訴え、それが保育園の子どもだけでなく、自分の子どもにも悪影響を与えるのではないかと懸念している。それに加え、核家族の人は、今後、仕事と家庭の両立ができるかどうか心配している。

(3) 20代後半、独身の場合

女性ばかりで、いろいろ保育に対する話し合いをしても「これ以上言うと、気を悪くするかもしれない」と思い、最後まで話し合うことができず、なァなァになってしまうことが多く、やる気をなくしてしまう。仕事ではやはり男性的な議論をしたい時もある。そのため各自、好きな教育をして共通性がない。納得いくまで話し合いがしたい、やはり皆さん家庭があったりして、わかったふりをするのもあ

る。書類なども多く、休みの日も書類に追われる。プライベートの時間がほしい。(4人 実父 実母 祖母)

次々に新しい事業が導入されている。また、いろいろ気になる子ども増え、子どもを取り巻く環境も変わってきているため、常に保育士も学習が必要である。この仕事は家族の理解と協力が必要だと思う。(4人 実父 実母 祖母)

保父さんがちらほら見受けられ、男性も表せるように保育士という名称に変わったといえ、保育所はまだまだ女性だけの職場である。それゆえ、気楽なこともあるだろうが、反面、女だけの職場であるだけに問題もあるようである。やはりあらゆる職場で男と女がほどよく混じっているほうが、仕事の上でも人間関係的にも良いようである。また乳幼児保育や長時間保育などの保育の多様化や、落ち着きのない子どもや情緒にやや問題がある子どもも増え、離婚の増加に伴うひとり親家庭なども増えているので、保育士も常に勉強する必要があると訴えている。

(4) 30代前半、独身の場合

保育士になりたいと思い、なれてうれしかった。書類は園で書く時間がないため、家に持ち帰り、書いている。持ち帰りが多く、仕事もきついが「やっていて良かった」と実感することもあり、現在に至っている。(3人 実父 実母)

保育士になって11年ですが、ますます責任の重い仕事だなあと実感しています。続けるためにはとてもパワーのいる仕事だと思うので、結婚して子どもができると、仕事との両立は難しいじゃないかと思っています。それと、人の子どもをみるよりは、自分の子どもをみたいと思うじゃないかなあと思いません。(1人)

いくら30代前半の独身女性が増えているとはいえ、彼女たちの心境は結婚のことで揺れ動いているはずである。30代前半独身で自由記述に書き込んでくれたのはこの2人だけである。前者の場合は、つい30歳を過ぎてしまったが、仕事に生きがいを見出している様子が見えるが、後者の場合は、結婚のことがまず眼中にあり、仕事の責任の重さやきつさから、結婚したら仕事をやめ、家庭に入りたいと考えている。

(5) 30代前半、既婚の場合

一般に、女性は結婚すると、20代後半から30代前半にかけて、仕事をやめて子育てに専念する 경우가多いが、仕事を継続している保育士の場合はどのように子育てや家事と両立しているか見てみよう。

子どもがまだ保育所に行っていないので、実家の父母に見てもらっているので、すごく助かる。実家への送り迎えは大変だが、夫と交代しながら頑張っている。子どもを見てもらっているおかげで、安心して保育士の仕事ができる。(4人 夫 息子 娘)

年齢を重ねるごとに体がきつくなり、若い頃のがんばりがきかなくなったことは事実。でもけっこう、この仕事が好きだから続けていられるように思う。他人の子どもに一生懸命で自分の娘には手抜きをして、自分が描く理想の子どもと実際の娘の姿にこんなはずではなかったと思い、すまなくなってしまう。母親ができないところを義母に助けてもらって仕事を続けていると痛感している。家庭に仕事を持ち込

まないように思っているが、たまった書類を書いている自分がいやになるが、やむなしという感じ・・・できるだけ残業(ふるしき残業)もしないように休憩時間も仕事をしている。一時保育、休日保育などどんどん仕事量が増加。将来が怖くなる。(6人 夫 義父 義母 娘)

30歳を越えるとどんな人で多少なりとも体力の衰えを感じる。まして仕事を継続している女性は日中は仕事、夜は家事をこなさなければならず、自分の健康が心配だという声も多い。⁸ そのうえ小さい子どもを抱えていると、仕事と家事に加え、子育てが重くのしかかる。そんな場合、義父母にしろ、実父母にしろ、子育てを助けてくれる人がいないと、仕事を継続することはほとんど不可能である。30代前半の回答者11人のうち10人もが拡大家族であり、残り1人の場合も、実家の両親が日中、幼い子どもの世話をしている。また保育所では仕事として他人の子どもを一生懸命世話をしているのに引き換え、自分の子どもとなると手抜きをしているのではないかと、母親として自責の念に駆られている記述があらゆる年齢に少なからず見られる。⁹

(6) 30代後半の場合¹⁰

30代後半ともなると、子どもに手がからなくなり、子育てのために家庭に入っていた女性も再就職し始めるが、ずっと仕事を続けてきた保育士の場合はどうであろうか。

仕事を家庭に持ち帰ることが多く、また勤務時間も不規則なので、自分で選んだので本人はがまんできますが、家族(特に子ども)にはさびしい思いをさせていることが多く、心苦しくなることがあります。延長保育が実施され、またいろいろな特別保育の導入など、就職した頃と職場環境ががらりと変わりました。今から子どもを出産される方は両立はとても難しいと思います。家庭と自分の健康第一。家事は適当に手抜きをして、疲労(ストレス)をためないようにする。子どもの病気の際も、欠勤は難しいので早めの手当てを心がけ、重症にしない。忙しい中にも自分の時間を持つようにし、心のリフレッシュをはかる。(4人 夫 息子 娘)

保母という仕事は対人間であり、子どもたち一人ひとりの発達にあった関わりをしていくと、家族の協力がなければ、精神的、肉体的にとってもきつい仕事だと思う。いくら疲れて家に帰ってきても、すぐに家事・育児をこなしていかなければならない。実母のおかげで現在も保母という仕事ができている。夫がもう少し保母の仕事を理解し、協力してくれると、幾分ストレスもたまらないのではないかなと思う。睡眠時間ももっとほしい。保母という仕事は本当に多すぎると思う。やりがいがあるが・・・保母の数が少なすぎる。(7人 夫 実父 実母 息子 娘)

大なり小なり男も女も職場ではなんらかのストレスを感じている。その原因として、一般に職場の人間関係、仕事密度、仕事不適應があげられる。¹¹ 保育士の場合は職場の人間関係や仕事不適應よりも仕事の密度がストレスの最大の原因である。「泣く子と地頭には勝てぬ」という言葉が示すように、我が子であっても子育てにはストレスも伴う。まして他人の子どもを日中ずっと世話をするのは、責任が伴うだけにいっそう心身の疲れをもたらす。ところが保育士の仕事は子ども相手の遊び半分の気楽な仕事と思われがちなので、余計にストレスがたまる。人間は自分の苦勞を他者にわかってもらえれば、その苦勞はかなり軽減するものだが、保育士の場合は他者の理解がなかなか得られない。本来ならば、夫が一番の理解者になるべきだが、夫は家庭に帰ると妻に安らぎを求め、妻の仕事の苦勞を察し、ねぎらいの言葉などをかけたりすることも、家事や育児を協力する気もほとんどない。「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業が夫婦の協調をはばんでいるだけでなく、働く女性は「男は仕事、女は家庭に仕事」という二重負担にあえぐことになる。

(7) 40代前半の場合

40歳を過ぎると、保育所ではベテランの域に達するが、子どもが思春期を過ぎ、親離れが始まる。

人作りの基礎がいかに大切であるか痛感している。また、やりがいもあり、毎日、とても充実している。しかし40歳を過ぎると、体がきつい。自分のできる限り働き、できないことは土、日にやったり、家族に協力を求めている。いかに元気で働けるか、健康について気をつけている。自分の子どもから、すごいエネルギーをいただいて働けることに感謝している。(5人 夫 息子 娘)

仕事を楽しむ。講演会、ボランティアなどいろいろな活動への参加を楽しみ、保育士以外の職業の人たちに意見などを聞き、幅広い考えが持てるようにする。挑戦する心を忘れず、どんなことにも積極的に取り込んでいく。仕事を理解してもらい、協力してもらるように話したり、子どもたちには職場での応援や、家庭でできることをしてもらおう。また家事分担の協力、子どもたちが動けば周りの大人たちの協力もある。異動により、早番の時間が遅く、遅番のない保育所に移ったが、早番、遅番のしっかりある保育所に異動になると、食事の準備など家族の協力がなければ、精神的、肉体的に仕事を続けることは困難です。

(7人 夫 義父 美母 息子 娘)

30代に比べて、子どもが手を離れたせいか、職場でも家庭でもいくぶん余裕が見られるようになる。日々の仕事に充実感を見出しただけでなく、仕事以外の人や場所にも足を運び、人生を楽しんでいる。それができるのも夫や家族の協力があるからである。働く女性にとって、家族の物心両面にわたるサポートが仕事のストレスを減らすだけでなく、仕事や人生そのものへの満足感を生む。¹² その家族には夫や義父母だけでなく、成長した子どもたちも含まれるようになる。子どもは精神的には乳離れするが、大人に向かうにつれ、母親の仕事に理解を示し、家事など協力するようになる。子どもは幼い頃は情緒的サポート、成長してから道具的サポートをになう存在となる。

(8) 40代後半の場合

40代後半になると、子どもたちが精神的に親離れすると裏腹に、一般に教育費が一番かかる時である。しかし家計の苦しさを訴える回答は皆無だった。自分もフルタイムで働いているので、家計は割と楽しい。

他人の子どものことはわかっているけど、自分の子どものことはわからない寂しい職業だと思ふ反面、たくさんの子どもの親代わりで、実の親以上に長く関わることができる喜びがあると思います。たくさん笑顔と甘える姿に、疲れが吹き飛びます。やりがいのある仕事だとも思いますが、現在は少子化対策ということばかり強調され、親に対する政策は過重なほどなのに、子どもだけが置いてきぼり、という感じがします。親のエゴの犠牲になる子どもたち、朝早くから遅くまで保育所に預けられ、人権の保障はあるのでしょうか？ 私たち保母にも力の限界があります。どんなにかわいがっても親にはなれません。母以上のものがあるのでしょうか？(3人 夫 娘)

子どもを取り巻く社会状況がどんどん子どもを孤独にし、子どもを親から引き離し、愛情を感じられないようにしているように思います。私も家庭と仕事の両立に思い悩み、落ち込んだときもありましたが、子どもたちの笑顔にどれだけ救われたかわかりません。自分の子ども、仕事の子どもの両方

の笑顔にです。その分、この仕事を選んで良かったと思っています。(7人 夫 義母 息子 娘)

無我夢中の子育てが終わると、自分の子育てに反省の目を向けるとともに、世間一般の子どもたちが置かれている状況に目を向ける余裕が出てくる。自分の子育てを他人まかせにしてきたことに自責の念を覚えるとともに、いくら日中、自分が子どもたちに母親代わりで一生懸命世話をしても、母親にはかなわないと実感する。

(9) 50代前半の場合

50歳を越えると、自分の子育てだけでなく、世間一般の子育てや保護者のことなどにも、関心が強くなる。

とにかくむずかしくなってきましたね。10年前の子どもと今の子どもの違い。それと同時に親の考え方がさまざまなので、やりにくくなってきました。(3人 夫 娘)

学生時代、恩師の「一隅を照らす」という話に感動し、ずっとその思いを持ち続けたいと願いつつ今日に至っているが、昨今の青少年の事件を耳にするたびに、ますます乳幼児期の人的環境の大切さを痛感させられ、保育の仕事の奥深さに身が引き締まる思いです。家庭との両立では、以前は家族に負担がかからないようにとがんばっていたが、子どもが成長し、ひとりで頑張らず家族にも協力をお願いして、無理をしないようにしている。仕事と家庭だけでは、と考え、趣味を見つけ、ストレスがたまらないようにしている。(5人 夫 義母 息子 娘)

自分の子どもが巣立つ年齢に達し、無我夢中で行なってきた自分の子育てと仕事を感慨深く振り返りつつ、保育士の仕事の重要性を改めて認識している。かといって仕事だけをがむしゃらに頑張るのではなく、趣味の大切さを訴えている。子どもに関しても、人生や世の中に関しても視野が広がってきたのであろう。

(10) 50代後半の場合

50代後半になると、定年が間近に迫り、自分が歩んできた保育士という仕事を感慨深く振り返っている。

子どもが自ら成長しようとしているのを援助し、保護者と共に保育することに喜びを感じている。子どもの若い“気”を浴びて元気になる。仕事中は仕事のことに専念する。仕事の処理方法を工夫し、仕事をためないようにする。常に先の見通しを持つ。(2人 夫)

情熱的にすごせたらと思っています。(2人 実母)

人生のすべてをかけてきた。これも家族の支えがあったからだと思う。夫や義母、息子、娘の努力に「ありがとう」を常に思っている。(6人 夫 義母 息子 娘 夫のきょうだい)

あらゆる年代の保育士が、仕事の苦勞は子どもたちの笑顔で帳消しになった、と異口同音に述べているが、50代後半の保育士も同様である。自分の子どもにしる、他人の子どもにしる、子どもは何かと手がかかるが、それだけに子どもたちから元気ももらって、仕事や生きる張り合いにするのが人の常である。

また一般に女性にとって一番大切なものは「家族・子ども」であるが、¹³ 保育士という仕事を継続することができたのも、家族のおかげだと感謝している。働く女性にとって、家族は物心両面にわたるかけがいのな

いサポーターなのである。

4. おわりに

以上、自由記述に書き込んでくれた301名の中から23名のみを選び、簡単な考察を行なったが、彼女たちだけでなくそれ以外の回答者の記述も含めてまとめてみよう。

まず保育士という仕事が思いのほかきついと、一様にもらしている。子どもが好きで就いた仕事だが、それだけでは長続きしないと述べている。これはあらゆる職業に当てはまることだろうが、保育士は子ども相手の遊び半分の仕事だと一般にみなされているので、よけいに仕事に就いてから、その厳しさにとまどうのである。その厳しさを世間一般に知らせたいという気持ちが強いが、その手始めに夫や姑を説き伏せたという回答もあった。

しかし、仕事のきつさも、子どもたちの笑顔で救われたり、子どもたちから元気を分けてもらえると言う。子どもたちは仕事の対象でさまざまな苦勞の種だが、反面、そんな彼らから励まされてもいる。他人の子どもにしる自分の子どもにしる、子どもは苦勞もかけるが、生きる張り合いを生む存在なのである。人間相手の仕事は気苦勞も多いが、やりがいもある。まして相手が幼い子どもである場合、彼らが日一日と成長していく姿を見ると、保育士の仕事の素晴らしさを改めて実感するのである。

保育士は子どもの成長を手助けする仕事だが、自分の子どもの世話しなければならない。働く女性として日中は子どもを保育園に預けなければならない。他人の子どもの世話をしながら、自分の子どもは他人に面倒をみてもらうのである。そのことに後ろめたさを感じずる保育士もいる。子どもが3歳位までは母親がつきっきりで世話をすべきだという3歳児神話にとらわれているのである。他人の子どもの世話にかまけて、自分の子どもの世話がおろそかになっているのではないかと自責に念に駆られることもある。

また、保育園に通う子どもたちの保護者との関わりに頭を悩ますこともある。その内実は詳しくは記述されていなかったが、おそらく親意識に欠ける子どもみたいな親がいるのだろう。子どもの世話だけでなく、しつけも一方的に保育士に押し付け、何かと文句をつけたり、不満を述べたてるのであろう。

とりわけ専業主婦であるのもかわらず、保育園に子どもを預け、自分は遊んでいる母親に対して、保育士は敵愾心を燃やすことがある。3歳児神話からみれば、そんな母親は育児放棄にも等しい所業を犯しているだけでなく、汗水たらして働いている保育士からみれば、贅沢三昧の能天気な生活に見えるのである。

保育士が仕事を継続できたのは、同居しているにしる、同居していないにしる、夫や自分の両親、さらに夫が子育てや家事を手伝ってくれたおかげだ、という回答が大部分である。女性が仕事を継続するのは、家族の協力が不可欠なのである。「男は仕事、女は家庭に仕事」という新性別役割分業は、働く女性に対して協力者がいないと実行が難しい。

また家庭と仕事を両立するのは、家事を手抜きすることも大事だと言う。仕事に加え家事や子育てを一生懸命にやりすぎると、体も心ももたない。燃えつき症候群にかかり、心も体もダメになりかねない。適当に力を抜くことが何事においても大事である。

このようにみえてくると、好きでなった保育士だが、余りの忙しさに挫けそうになりながらも、家族に助けられて子育てや家事をこなし、保護者の対応に心を悩ますこともあるが、子どもたちの笑顔に元気付けられる素晴らしい仕事だと自負している保育士像が浮かび上がってくる。

注

1 井上輝子・江原由美子(編)『女性のデータブック 第3版』41頁 有斐閣 1999年。

-
- ² 2000年に富山県内の公立保育所に勤務する956名の保育士に質問紙を郵送した。その結果531名から回答を得た。その集計結果は昨年度の紀要に掲載した。
- ³ 531名の回答者のうち、301名もの人が書き込んでくれた。年齢別に言えば、20 - 24歳の独身者が15名、既婚者が2名、25 - 29歳の独身者が14名、既婚者が10名、30 - 34歳の独身者が2名、既婚者が11名、以下すべて既婚者だが、35 - 39歳が13名、40 - 44歳が65名、45 - 49歳が90名、50 - 54歳が57名、55歳以上が22名である。
- ⁴ しかし「保育士の仕事と家庭」の調査を実施した2000年度には、筆者が市町村職員名簿で調べた限り、富山県内の公立保育所に勤める保父さんは見当たらなかった。但し2001年10月26日付けの北日本新聞に、新湊市作道保育所に4月から勤めた22歳の男性保育士が紹介されている。新聞で紹介されるということは、それだけ少ないということであろう。
- ⁵ 2001年4月3日付け北日本新聞で「保育士「意外に大変」」という見出しで紹介された。
- ⁶ ()内は家族数と家族構成。以下同様。
- ⁷ 永井広克「保育士の仕事と家庭」『富山国際大学人文社会学部紀要』VOL2 30頁 2002年。
- ⁸ フォーラム 女性の生活と展望(編)『図表でみる女の現在』 56頁 ミネルヴァ書房 1994年。
- ⁹ 保育士は自分の子どもを保育所に預けて働いているので、「3歳児神話」にとらわれ、自責の念に駆られることも多い。大日向雅美『母性愛神話とのたたかい』 146頁 草土文化 2002年。
- ¹⁰ 以下の年齢はすべて既婚者。
- ¹¹ 中川昌代(編)『働く女性』94頁 文真堂 2000年。
- ¹² 諸井克英他『彷徨するワーキングウーマン』95頁 北樹出版 2001年。
- ¹³ 坂東真理子(編)『図で見る日本の女性のデータバンク』 136頁 財務省印刷局 2001年。